

緊急消防援助隊広域活動拠点に関する検討会（第 2 回）議事要旨

1 検討会の概要

- (1) 日 時：平成 24 年 10 月 22 日（月） 10：00～12：00
- (2) 場 所：あすか会議室、ダイヤ八重洲ビル 3 階 303 号室 A
- (3) 出席者 小林座長（東京理科大学大学院国際火災科学研究科教授）
重川委員（富士常葉大学大学院環境防災研究科教授）
五十嵐委員（東京消防庁航空隊長）
川北委員（四日市市消防本部消防長）
高橋委員（宮城県総務部消防課長）
永江委員（静岡県危機管理部消防保安課長） 欠席

2 概要

- 冒頭、座長の挨拶及び議事進行により検討会を開催した。
- 委員からの提供資料及び事務局からの会議資料の説明を行った。

【各委員の主な意見】

(1) 報告事項について

ア. 広域拠点に関する実態調査

- 広域防災拠点と進出拠点があるが、緊急消防援助隊の進出拠点は、はっきりしているが、今度の緊急消防援助隊広域活動拠点というのは、どういう関係になるのかわかりづらい。
- 広域活動拠点をまとめていく段階でその性格、広域防災拠点と進出拠点との位置づけとかをきちんとして行かないといけない気がするが、今の段階では、とりあえず調査と言うことなのでこれで行きたいと思う。
- 調査結果の中には、都市公園、スポーツ施設を避難所として位置づけているところは多いが、防災を目的としているものではない。そうしたものも回答してきている。本当の防災を目的とした拠点整備は、都道府県レベルではほとんどないのが実態ではないか。

イ. 地域資源活用の実例の調査

- 5 つの「消防活動を意識した協定」というのは、東京都が結んでいるが、東京都内の災害において大規模災害、震災等をベースに考えているもので、緊急消防援助隊として他県に行くときの協定ではない。
- この地域資源の実例の調査は、ほとんど資源という話で、避難者、被災者に

対しての支援の調査のようであるが、緊急消防援助隊が早めに行ったときをどう絡めるといふ調査結果となっているのか。

- 民間企業は、とりあえず被災者支援ということが一番念頭にあるだろうけれども、緊急消防援助隊を含めた活動を理解してもらえば、当然いろいろな形で支援をしたい、あるいは、してくれる可能性は、十二分にあるのではないか。
高速道路のサービスエリアでの支援活動を見ていてそういう可能性もあるし、今後そういう所に広げていくことは十分可能であると思う。

- 地域資源の実例の調査は、阪神・淡路、中越、東日本の実例をあげられているが、緊援隊が活動拠点での地域資源を当てにすることではなく、自己完結で必要なものを携行していくが、現地で活動する時にそこに応援してもらえば更によかったということがあると思う。

しかし持って行くのは、大変だから現場で用意してもらいたい、それは協定等でやってもらえるとありがたいというのは、むしろこのような調査から出てくるのではなく、緊急消防援助隊の経験から持って行くのが大変だからこれだけは何とかしてほしいというものとして、考えた方がよいかもかもしれない。

- 消防自体は、自己完結型なので基本的には、食料をはじめ何からなにまで全部積んでいく。

現地で（調達を）当てにすることを考えて行くと緊急消防援助隊そのものの活動ができない。

むしろ現地でやってほしいのは、緊急消防援助隊が働きやすいような燃料とか何日も活動した後のシャワーや体を拭いたり、仮眠できる施設などの健康管理上の施設の提供などがあれば活動しやすくなると思う。

それと重機類などのように現地である程度協定を結んでもらい民間から借りて道路啓開をしてもらおうと良いと思うが、基本的には、自己完結で行きたいと思う。

- 前回の会議で広域活動拠点というものは、時間軸で考えて行くのがベストだという話が出たが、初期は自己完結で行き、1週間たったときは、少しずつこのような協定が動いてくる。2週間、3週間目には、民間ベースの協定等が動いて行って被災者だけでなく、緊急消防援助隊にも後押ししてもらえるというような時間軸で動いていくための調査としては、地域資源といってもいいかと思う。まさに1週間は飲まず食わずで頑張る組織としてつくられてきているからその通りであると思う。

- 消防は、最初の3日間程度は自立型でいいが、長期になるとトイレや燃料等の問題は地元もしくは付近に頼らざるを得ない。

横断的に全部を対象としてベース拠点を考えるのか、消防だけでいいのか、

という所に戻ってきてしまい、県で抱える問題と消防で抱える問題とはやや乖離しているように感じる。

- 特に消防活動は地震、津波の場合は、都市部では、消火活動はあるが、やはり救助活動が多いと思う。

最初の3日、長くて1週間が消防本来の活動であると思うので、それなりの活動は自分のところでやろうと思うが、今回のように長期になるとそれぞれの本部で用意することが難しくなるので、そういう意味では、広域拠点の中にある程度準備してもらおうと非常に助かる。

- 緊急消防援助隊というのを狭義に捉えるかどうかで変わってくる。多分1週間以上経つと消防の応援部隊のような形で緊急消防援助隊とは、ちょっと性格が違ったものになっていくかもしれないのでそれをどの辺まで広げて検討するかということだ。視野を狭めてやる必要はないが、緊急消防援助隊というふうに一本にくくってやると1ヶ月経っても緊急消防援助隊かなという感じもするので、その辺は少し書き分け、定義をきちっと考える必要があるのではないか。

- こんなに長いのは初めてだと思う。東京の場合は、3日ないしは4日で全部クルーを交代する方法をとった。自己完結で行ってもうだめだとなったら次の自己完結を送り込むというふうに交代交代でやってきた。長期間の緊急消防援助隊員としての活動をするのであれば、当然今まで考えているようなスキームではなく、ロングスパンのロジも含めて考えて行かないと、今回のような大きな災害だと恐らく対応しきれないと思う。

(2) 地域資源のネットワーク化による整備手法

(3) 標準モデルの考え方

(4) 情報提供 について

- 都道府県レベルでの広域防災拠点、各地区のブロックごとの拠点、各市町村の拠点（実際活動拠点になる）について役割分担等の面からもう少し整理したらどうかと思う。

- 活動拠点というのは消防だけなのか、ほんとうに自衛隊、警察と組むのかとか、大きく分けると被災者と救助者側という考え方で最初に関係機関が個々に入っていくけれど3日ぐらいすると当然連携が始まり、例えば消防と警察と自衛隊が1つの拠点として組めればすごく有用である。この表で書いてある流れが、時間軸によって必要なものがどんどん組み立てられていって、最後は立派なキャンプサイトができるという考え方ならいいが、最初からどこま

で行くのかという考えが見えなくてわかりづらいと思う。

- 緊急消防援助隊の活動拠点と言うタイトルなので活動効率から考えると最前線に最も近い所にキャンプをつくって、実際にはそこで寝泊まりをしたり、ご飯を食べたり、トイレを使ったりして毎日被災地に行くわけである。
従ってそこを飛び出していく為の活動拠点にしたいのか、それとも様々の救助機関が連携すること、現地調達が難しいような様々な後方支援、燃料なども含めて個々で一括的に供給できるような機能を持たせるのか。その辺について今回の活動拠点の性格や位置づけが見えにくい。
- 緊急消防援助隊とは、どのようなものでどういう活動をするのか。
それは状況によって随分違って来るし、時間軸によっても違うはずである。
実際にどういうことをしたいのか、まずそっちから整理して、それに対して拠点とはこうあるべきだということが必要ではないかと思うが、(案では)拠点というのはこういうもので、こういうものが必要だというふうにざっとかき集めている感じがし、活動が立体的に想定されていないと思う。そのため緊急消防援助隊の活動をもう少し具体的に検討し、どういう活動になるのか過去の中越地震等の時にどういう活動をしたのか、それがだんだん進化して東日本で非常に立派な活動をされ、それを経験した人に聞いて、そこから整理すべきであると思う。
拠点を整備しなければいけないというのがまずあって、それに対してどうしようかということからかき集めた感じがしてしまうところをもう少し検討してほしい。
- 時間軸での考え方が必要。更には、「災害対策本部」があるということを考えていかねばならない。
- 基本的には、72時間あるいは自分たちで自活できるものは持って行こう、そして現地で活動している中で不足するもの、不自由になったものは地元の地域資源を活用しようという考え方でよいと思う。
交代クルーが3日間あるいは4日間で交代すると言うことであれば、それなりに協定を結んだ支援物資の提供もできると思うが基本的には衣食住の内的一部分を自己完結して、不足する場合は、予めの協定で提供してもらうこともできると思う。
- 地形とか、時間軸といったことを考え、場合分けをしてどういう活動をどのようにしていくか、幾つかの典型的なものに分けて考えていく、その中で広域活動拠点とはどうあるべきか、予め必要とする装備はどういうものかといったことを整理し、指針的なものをつくるということも必要ではないか。非常に難しいとは思いますが、幅広くシミュレーションして欲しいと思う。

- 資料3, 4に書かれていることは、今までの緊急消防援助隊の苦労を考えるとほんとうに必要で重要なことで、是非こういうものを積極的に進めて行くことが絶対必要であると思う。

しかしそれと広域活動拠点とは別物であると思う。

緊急消防援助隊の広域活動拠点というのは様々な機関が連携するようなレベルのものなのか、それとも極力現場に近いのだが、少し引いたところで隊員達の活動環境をよくするような、緊急消防援助隊の活動支援を目的とするものなのか、広域活動拠点といってもレベルがあると思うのでそこをちょっと分けるとともに資料3, 4とリンクさせないと議論がしにくい。

- ベースキャンプについては、キャンプ地がどんどん集約されていく。

宮城県では、南の方は消防活動が終わって、今度は、捜索というと、全国警察官とかのキャンプのように機能、役割分担等がどんどん時間軸とともにエリアも移動していく。それは、対策本部の現状把握と市町村からのニーズからもそのようになっていく。そこにまたボランティアが入ってくる。応援資源とか資機材が入ってきて、仕分けということがおこる。立体的になってくる。

- 最初の1週間ぐらいは、消防の仕事はすごく大きいと思うが、だんだんとそれが少なくなってきて一般行政になってきて、その時になかなか特別扱いするわけにも行かないというときに、こういう拠点などをどのように位置づけて、どうやって整備しておくかとか、どうやって使っていくのかとか、問題点を指摘するには簡単だけど答えをつくるのは難しそうである。

そこをちゃんと考えないとやった甲斐がないような気がする。